
魔法少女リリカルなのは～次元世界に降り立つ怪盗～

ハムカッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜次元世界に降り立つ怪盗〜

【Nコード】

N2575W

【作者名】

ハムカッタ

【あらすじ】

あまねく次元世界を束ねる時空管理局。その時空管理局の首都惑星ミッドチルダに怪盗と警部が降り立った！！

世界的怪盗とそれを追い続ける警部は何をこの世界にもたらすのか！！（それは作者も知らない爆）

”これは好評のあった怪盗inミッドチルダの連載バ・ジョンです。短編もよろしく！！さあ今すぐ私のページにアクセスするのだ”

プロローグ

世界は一つではない。世界は隣り合っているだけで全く別の世界があってもおかしくはない。

パラレルワールドという考えがあるが、これもエヴァレットの多世界解釈、多元宇宙論など現実にも理論が展開されている。これは、パラレルワールドでこないが他世界に迷い込んだ怪盗達プラス一名の物語である。

フランスのパリといえれば何を浮かべるだろうか？エッフェル塔やルーブル美術館など様々なものがあるだろうけどなんととってもお洒落な町ではないだろうか？

そんなお洒落な町のイメージのあるパリだが今はお洒落とは程遠い光景が展開されていた。

「待て、ルパン！！逮捕だあ！！」

そう叫ぶのは、ICPOのルパン専任名（迷？）捜査官の銭形警部だった。いつもの帽子にトレンチコートという姿で走っている。走っている目の前には、当然といえれば当然だがルパン、次元、五右衛門の三人が銭形からの逃避行を走って続けている。

ルパンはフランスのルーブル美術館のローマ帝国時代のものさえある工芸品部門から莫大な量を誇る数ある遺品の中でエジプトゆかりの小さな手のひら大の彫像を盗み出すと予告しフランスは威信にかけても貴重な遺品を守ると厳重な警備体制を銭形の元しいた。だがそれもルパン達のテクニクの前では意味がなくなりびやかでないため普通の人間の感性を刺激しはしないだろうが、かなり高度な職人芸を施された歴史遺品を盗み出されてしまった。

その後すぐルパンを体制を立て直して追跡したのだが、ルパンのドライビングテクニクとまきびし状のトラップによって警察車両は

無力化された。しかしそれでも銭形が諦めずルパンの愛車フィアット500のタイヤを銃でパンクさせたことによっておいかけっこが始まった。

初めは他の警官もいたのだが、屋根さえも登る追いかけのにおいかけっこについていけるはずもなくルパン達と銭形のみになっていた。

パリ市民にとって迷惑なこの追跡劇もいよいよ終幕に差し掛かるうとしていた。

「逃がすかあゝルパン!!」

その叫びとともに銭形警部は、ルパン目掛けて何かを投げつけた。

それはロープ付きの手錠だった。

そんなものが当たるはずがないし当たっても拘束できやしないのだが、銭形警部の絶技がそれを可能としていた。

見事手錠は狙いがそれることなくルパンの腕に回り腕にまきつき拘束されてしまった。

次元と五右門が素早く動き手錠を外そうとしたがそれを銭形警部の銃・コルトガバメントを発砲し牽制した。

大型拳銃と銭形の射撃の腕を恐れ行動をやめてしまう。

「ルパン、これでお前も年貢の納め時だ。」

「よく言うぜ、とつつあん。いつも俺に逃げられてるくせに。」

そう銭形は、ルパンを逮捕できてもルパンにいつも逃げられている。だから今回もルパンが逮捕されて脱獄になったかもしれない。

そう突発的なこの世界で知られていない現象が襲うまでは――

それを見ていた人はこういった「彼らは光みたいなものに包まれたんだ、それも直視できないほどのね。眩しくて目を閉じていたんだけど光がやんだと思ったから目を開けたら彼らは消えていたんだ。」と。

無論こんな目撃を警察が信用するはずもなく、ルパン達と銭形の追

跡と搜索が続けられることになったがあれほど世界を騒がした彼らは二度と現れなくなった。やがてその記憶はあるスパイや泥棒など多角的な活動をする女性と生還を待つとある警部の妻と娘を除いて世間から薄れていった。

その日怪盗と警部はその世界から忽然と消え去ったのだった。

だが彼らは生きている。その世界の人々の預かり知れぬところに。

プロローグ（後書き）

ル・ブル美術館の設定はエジプトゆかりの品があるか知りませんが一応事実に基づいています。それと銭形は意外にも妻帯者で娘もいます。

峰不二子は次元転移に巻き込まれていないので登場しません、不二子ファンのひとごめん。

第1話 ミッドチルダ

時空管理局の首都惑星ミッドチルダ。時空管理局とは、次元間を航行し十分な技術レベルに達した世界を管理世界とし警察・司法・裁判所として多次元に介入している組織だ。といっても管理外世界という十分な技術レベルに達しない世界を含まないなど全て支配しているわけではない。

その時空管理局の首都惑星ミッドチルダの大都市クラナガンの近郊の森林地帯では大規模な演習が行われていた。時空管理局の内実は軍隊に近く、ここでは教導隊の人間によって新兵教練に値するものと森林地帯でのサバイバルを叩き込んでいるところだった。

その演習を見たら、その能力の存在を知らないものは目を見張るだろう。

何故ならアニメや漫画にしか出てこないファンタジックな衣装に実を包み、空を飛んでいるのだから。

有名なとある作家は「発達した科学は魔法のように見える。」といったがそのものずばりで魔法を実証しているのだ。といってもファンタジックなものではなく特殊な生体組織を元にエネルギー素粒子を操るものであり、それが魔法と名付けられているだけにすぎない。

その演習の中、女性教導官と訓練生数名が演習を行っていた。教導官の周囲を半円形という有利なポジションで取り囲んでいるが、魔導師で高位クラスなら全てではないが逆転してしまうため警戒を緩めなかった。何せ犯罪者からは魔王や悪魔とも呼ばれる最高位の魔導師なのだから。

訓練生の中で砲撃魔導師の人間が目標に向けて大量の光弾を凄まじい勢いで発射する。目にも止まらぬ勢いで目標に着弾すると同時に

爆音が当たり一体をとどろかしたが彼女は無事だった。プロテクションなどの防御魔法を展開して防いだのだろう。だが、狙いはそれではない。

砲撃を終えると同時に訓練生の中で一人いた近接戦闘に特化したベール力式の魔導師が剣型のデバイスを展開させながら突っこんでいく。相手を砲撃でけん制すると同時に近接戦に持ち込んで倒すつもりなのだった。遠距離戦闘特化の相手はその分近接戦闘に弱いことを付いた作戦なのだった。

そして彼女の体を剣型のデバイスが貫いた　　かに見えた。確かによく考えられた作戦なのだが、それだけでは彼女を相手に勝つことはできない。

そう実際は、剣を自分の体と接触するように見えた距離で相手の攻撃を見切り、攻撃を回避して意のだった。

それを訓練生が認識するよりも速く彼女の拳が腹部目掛けて放たれた。グツと腹を打たれて悶絶すると同時に地上へと落ちていく。バリアジャケット言う特殊な防御服を着ているので衝撃は大丈夫だろうし、腹部も実際は内臓破裂を引き起こすような攻撃ではないので問題はないだろう。

「さあ、次はこっちからの攻撃だよ。アクセルシューター!!」

微笑みながら彼女は攻撃魔法を放ってくるが、訓練生にとってそれは死の宣告にも等しい。ただ単に魔力弾を連続して放つのではなく同時に数重発の魔力弾がこちらに向かって放たれたのだから。

訓練生達もその攻撃を必死に回避しようと宙返りや木の葉落しなど様々な動作を行って対抗するが、意味はない。誘導能力を備えた莫大な魔力の塊によって一人一人と次から次へと落とされていく。

その中で最後まで粘った一人の訓練生も撃ち落とし、訓練はその女性教導官の勝利に終わった。

「そこまで演習中止だ。繰り返す、演習中止だ。」

突然頭の中に話しかけられてきた。頭の中に話しかけられたというなら慌てそうなものだがそのそぶりはない。念話という魔力を電磁波のように用いて脳内に話しかける通信を目的とした魔法だからだ。正直言つて自分が演習でやりすぎたのかと思つたのだが、他のまだ続いている演習でも終わつたところを見ると何かあつたのかもしれない。

そう判断した栗毛色の髪の女教導官―高町なのはは教導隊の士官級の面々が演習を見守っている観客席のような所へと近づいていく。

「なにかあつたんですか？」

「高町一等空尉か、さきほどの演習は見させてもらつたがあれはやりすぎだぞ。幾ら非殺傷設定といつてもな。」

そう声をかけたのはこの教導隊の指揮官である一人の佐官級の男性だった。非殺傷設定といつて時空管理局の使う魔法は魔力ダメージを与えるのみで、肉体的なダメージは与えないのだがそれにしても100%かどうかは分かつていない。事実ダメージをわずかながら与えてしまつた例もあるという。

「それについては申し訳ないと思っています。それより演習中止の理由は一体何なんですか？」

「ああ、それについてだが君に調査を任せたいと思つている。この森林地帯の1〜2キロ先のポイントで時空のゆがみが確認されたんだ。おそらく次元漂流か何かでミッドチルダに人間がたどり着いたんだろう。」

その調査を君に任せたい、いいね。」

「はい、分かりました。」

そう超えると彼女は飛行魔法を展開し素早く目標地へと向かつていく。

第2話 怪盗と刑事と銃使いと侍と、そして（前書き）

投稿遅れてすいません。今回はかなりグタグタなところがあるので遅れたのと合わせて、誤っておきます。

第2話 怪盗と刑事と銃使いと侍と、そして

「うーん」と呻き声を上げながらルパンは目を覚ました。何が起きたのかと周囲を見渡すと次元、五右衛門が傍らに少し離れたところには気絶しながらなおも手錠を握るといふ執念を持っている銭形が気絶していた。一瞬死んだかと思ったが胸が上下しているところを見ると、気絶しているのだろう。

そうだ確か〆狩りみたいなものに飲み込まれたんだとルパンが必死に今までのことを思い返していたのだが、一瞬完全に思考を放棄しそうになってしまうほどの衝撃が襲ってきた。実際は頼りなさげでスケベに見えても明晰な頭脳を持ち非常識な事態に慣れているルパンでさえも衝撃的だったのだ。

周囲は森に囲まれていた、密林というほどではないが青々と大自然の息吹を感じさせながら森が辺り一面を覆っていた。牧歌的な風景に心を奪われそうになるが、これは明らかにおかしい異常事態を象徴していた。

ルパンたちはパリ市内でいつものように追跡劇を繰り広げていたのだが、眼下に広がっているのはパリの高層建築と伝統的な街並みが広がるパリ中心部の景色ではなかった。パリに自然公園こそあるが、ここまで茂った森はないだろう。

これは一体何が自分たちにおきたと眼下のありえない景色を見ながらルパンが深刻に悩んだ時に「大丈夫か、ルパン。」「一体拙者たちに何が……」、「ルパン、たいくほだあ。」とそれぞれ呟きながら気絶していた三人が意識を取り戻した。そしてやはり眼前の光景に驚かされることになった。

世界有数の銃使い（ガンナー）や9代目を勤める石川五右衛門の子孫もルパンを追う敏腕捜査官もどれもがこんな状況でなければ笑い

たくなるような表情を顔に浮かべポカンとしていたかと思うと次には思い思いに叫んでいた。

「なんだよ、これは。ルパンどうしたんだ。」

「面妖な、まさか物の怪の仕業か。」

「こんなトリックで逃げようとしてもそうはいかないぞ、ルパン。」

「まずは、落ち着け。」とルパンはなんとか慌てる三人を落ち着かせようとした。普段は犬猿の仲のつつあんであってもこんな状況では意見が必要だし、実際は信頼関係があるのだった。

手錠は取り付けられたままできつあんと同伴するという状況だったが、ひとかたまりになると事態の把握を行おうとした。

「まずは、俺たちはパリ市内にいた。これはいいな。」

ルパンを除き全員がそれに頷くのを見ると、更に「ところが次起きてみるとこんなどこだか分からない場所にいきなり気絶していたんだ。何が起きたと思う。」と続けて問いかけた。

「拉致されたんじゃないのか、マモーの時みたいによ。」

「マモーって誰だ？」

銭形が疑問を発したがそれには取り合わずルパンは次元の質問に答える。

「確かにいきなり見知らぬ所にいたんだから、拉致されたのかもしれないなあ。だが、マモーの時は無理やりガスを使って眠らせて運んできたのだがあれは密閉空間だから出来たんだ。外なら拡散するし、拡散しない密度の重いガスならそれだとあの場にいた殆どが寝ていて大騒ぎになって犯人も脱出が難しくなるぜ。」

それにこんなところに放置して、何の要求もないってのは犯人に何のメリットがあるんだ。」

確かにルパンの言う通りにただ拉致するだけで何のメリットもありはしないのはおかしいと気づいた次元は押し黙った。次に五右衛門が「また、あの魔毛恭介という奴の仕業ではないのか。」と行って

きたが、それも「500年前でタイムスリップ技術を開発できるか。たしかに奴のタイムスリップ技術なら遠隔地へ移動できるだろうが、開発できるか分からないしそれに奴は復讐を考えてるだろうよ。

おかしくないか。」とこれも封殺されてしまった。

「儂は、あの光みたいなものが怪しいと思うんだが。ルパン、次元に五右衛門も覚えてるか。

あの鏡に飲み込まれたあとにこんな場所にいただろう。」

今まで黙っていて銭形が発言してきたが、銭形の言っていることが一番信憑性が高いと言えた。論理的整合性から見てもあの光に飲み込まれた後にこんな場所にいた以上は、あの光が関与しているのは間違いない……

「それはともかくルパン逮捕だ。儂らがなぜこんな所にいたのは理由が判然としないが、とにかく危害は加えられてないんだ。ここがどこか知らんが人家は歩けば出会えるだろうし、ケータイだってある。お前は刑務所の暗い檻の中に入ってもらおう。」

銭形は鋭い指摘をしてきたが、次の瞬間には鋭い指摘をしてきた鋭敏さはなりを潜め驚くほどの変り身の速さでルパンを逮捕しようとした。銭形にとってルパン逮捕が生涯の悲願でルパンを逮捕さえできればいいと考えているのだ。

「おいおい、こんな状況なのにとつあんは俺を逮捕しようつてのか。まずはここが何処でどういった方法で来たか特定するのが先じゃないか。」

「とにかく立て。」

「とつあん甘いな、俺がただでとつ捕まると思っているのか。」ルパンがそう言った瞬間、周囲一体は鼓膜が破壊されそうな勢いの音と先程の鏡ではないものの直視できないほどの光量に包まれていた。ルパンが袖口に隠し持っていた閃光榴弾を使用していたのだ。銭形も相当の戦闘能力の持ち主だが、さすがにこれには耐え切れずに思わず顔を多い伏せてしまった。

銭形が目を開けると、手錠には干からびたミイラのようなルパンの手のみがあった。もちろん、それは作り物で本物のルパンはというと、「あばよ、とつつあん。」と叫びながらあの一瞬で次元、五右衛門と共に数メートルの離れたところに立っていた。

当然銭形が逃すはずも無く、「ルパン、逃がさんぞ。ここがどこか知らんが儂とお前は運命の赤い糸のように結ばれているんだ。」と叫びながらルパンの追跡を開始しようとした。

そんな状況だった。天から力強い声が響いてきたのは。

「私は時空管理局戦技教導隊の高町なのは一等空尉です。皆さんを保護させてもらいます。」

そこには、バリアジャケットに身を包んだ不屈のエースオブエースが飛翔していた。

第2話 怪盗と刑事と銃使いと侍と、そして（後書き）

次回は、時空管理局の魔王が炸裂します。

第3話 魔王の降臨（前書き）

久々の更新です。ルパンたちには今回ひどい目にあってもらいます。

第3話 魔王の降臨

人間誰だつて空を人が飛んでる姿を見たら驚くだろう。それがマジツクといった状況でないなら尚更だ。

だが様々な非常識に慣れている彼らは違った。

なんとあるうことかなのは目の前で追跡劇を繰り広げようとしたのだ。

これに驚き慌てたのはなのはだった。今まで次元漂流者を何回か保護したこともあるし次元漂流者の行動パターンを勉強したこともある。それでもこんな反応を見せるものは皆無だろう。

「待ってください。私空飛んでいるんですよ。もっと注目してください。」

が、それでも追跡劇を展開しようとし何回か言ったあとに「いい加減にして欲しいの！とにかく話を聞いてください！」と怒鳴るように言うをやつと反応があつた。

しかし、その発言は彼女の中に潜んでいるかもしれない邪惡とでもいうべき性格を開花させることになるのだった。

「こっちは、忙しいんだ。そんな妙ちきりんな格好をしたやつを相手に知てられるか。」

「空を人間が飛べるわけないだろ。白乾児やマモーみたいに硬質ガラスか何かを使っているんだろ。」

ひょっとして、君が俺たちをこの場所に連れ去った主犯か？！

これは彼らの人格や経験則の発言から行ったのだが、それは彼女を・

ルパンたちはゾクリという殺気、いやそれよりもはるかに禍々しい瘴気とでもいうべきものに襲われた。その瘴気を発している方向を見ると、硬質ガラスか何かだと笑われた女性が笑みを浮かべていた。

その笑みは、彼女の体を包む純白の服装とは違い醜く歪みまるで悪魔、いや魔王かのようなだ。

「ふふふ、私たちだって好きでこんな格好してるわけじゃないの。防護機能を考えてこんなことをしてるだけで子供ならともかくこんな格好を好きですと思ってるの。フェイトちゃんは、高速機動に特化したバリアジャケットのせいで露出に悩んでるのに。

それと、これは硬質ガラスじゃなくて魔法なの。覚えておいてね。それじゃさようなら。エクセリオンバスター!!」

レイジングハートが「お待ちをマスター！」と静止しようとしたが、なのはの怒気に当てられ何も言えずに非殺傷設定でキレても出力を抑えているとはいえルパン達目掛けて高出力の収束された魔力の塊が発射された。

「ウワァー！なんだありゃ！」

今まで化け物といえる戦闘能力の持ち主や高度なオーバーテクノロジーを持つ相手と対峙した事はある。

だが、それらを嘲笑うような目の前のエネルギーの塊とも言えるモノは見たことがなかった。今からでは回避は間に合わない、そう思った瞬間彼らを飲み込んだ。

出力を抑えてあったとはいえその破壊力は凄まじかった。周辺の木々を薙ぎ散らかし、地面は炭化し広範囲に焼けこげが広がっていた。完全に生命力の溢れていた森からは変わっていた。

そんな状態でルパン達はどうと・・・

その状態でもルパンたちは生きていた。今までミサイル攻撃や爆撃に耐えていたことが幸いしたのか、再び気絶してはいるようだったが、服がまっ黒こげになっただけで無事だった。

「高町、今の魔力反応はなんだ！まさか発砲したんじゃないよな？」
念波、魔力を介した電磁波的な通信能力を介して彼女の頭の中に声が鳴り響いた。念波で訪ねてきたのは教導隊の上司だった。魔力反

応を感知して慌てて問いかけてきたのだ。

「何でもありません、次元漂流者を保護しただけです。」

「しかし、あの魔力反応は……」

「何でもありません、彼らを保護します。増援をお願いしますか？ 複数人が次元転移に巻き込まれたようですので。」

「ああ、わかった。」

今の彼女に詰問したら何をされるかわからないと本能的に感じた教導隊の上司は無視することにしたのだった。

第3話 魔王の降臨（後書き）

まあさすがのルパンたちも正面からまともに戦っては勝てないと思うんですね。

頭脳やアイテムを使って戦わせます。

第4話 あの人達は何者なの？

時空管理局の拠点は二つあり、それは「海」つまり次元航行部隊の本部と「陸」つまり陸上部隊の本部だ。

そして今高町なのは時空管理局地上本部 - 陸上部隊の拠点となる超高層ビル群の集合体の一室にいた。

次元漂流者の保護や支援を中心とする課のフロアで、この課に属する女性職員となのはが保護した？次元漂流者について話し合っているのだ。

基本的に次元漂流者の保護は、心のケアを考えて発見した人物が担当することになっているからだ。もっともそれは今回当てはまるか分からないが・・・

「ふう、やっとあの人達の取り調べから解放されたわ。」

「やっぱりあの人達だと大変ですよね。」

心底疲れた顔の職員になのはも同意する。

実は、今までこの女性職員はルパン達の取り調べに当たっていたのだ。

通常の次元漂流者も出身世界への帰還のため取り調べが行われるが、彼らの場合は犯罪者に対する尋問に近いだろう。

へりで気絶した彼らを搬送する途中に身元確認のため手荷物検査、悪く言えば物色が行われたが、身元を確認できたのはICPOという警察組織のIDを持っていた男だけで他の人間は運転免許証も保険証も何もかも身分証明できるものを持っていなかった。

それだけなら忘れただけかもしれないが刀を持っていた男の日本刀は真剣であってレプリカではなかった。警察組織に属すると分かった人間が持っていたスミスアンドウェットソンは別にしろ、ひげ面

や猿顔の赤ジャケットを着ている男はコンバットマグナムやワルサ
- P38という拳銃、つまりは質量兵器を持っていた。

これらは全て高性能の銃器であり護身用にはおかしいし更にガンベルトを持つなどただの一般人ではなくプロ犯罪者ではないかと考えられたのだ。

本局の到着と同時に何故か体だけでなく衣服までも回復していた彼らを人悶着あったが、厳重な事情聴取を武器を取り上げたとはいえ遥かに荒っぽい管理局員の同行の元行われたのだ。

その聴取の結果彼らが国際指名手配を受けながら逃走と犯行を繰り返すプロ犯罪者であることとそれを専任して追跡を任されている捜査官であることではない。

「高町一等空尉、彼らの聴取で分かったショッキングな事実を伝えるわ。」

彼らは地球出身者ということが判明しましたが、あなたの世界第97管理外世界ではないの。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2575w/>

魔法少女リリカルなのは～次元世界に降り立つ怪盗～

2011年11月12日22時57分発行